

「大阪には濃艶の巷が多い、そこには青春の血のもゆる、若人の前途をあやまらしむるあらゆる誘惑が完備してゐる、お前を、今その危険地帯に放し飼しようとするのである行け！」

文學青年であつた私の運命は、かくして、柳行李一個と、洋傘と新調の黒セルの夏服も身輕に、單身新橋驛を二三の友人に見送られて出發したのは、明治廿六年殘暑のきびしい秋の初めであつた。何時出發の汽車に乗つたかは今ちよつと思ひ出せないが、東海道を各驛停車しつゝ進行してその翌日の午後四時か五時ごろに、すでにその當時から廣告に眼立つ朝日ビールの吹田驛に着いて、いよ／＼この次は大阪梅田驛、手荷物を片付けて身仕舞をする、一晝夜以上乗り通しの疲労と煤煙とに汗ばんだ體を、車窓に横たへて暫く茫然と何を眺むるともなしに、蕨々の町つゞきを目送してゐる間に、早くも梅田驛に着く、もちろん一人の出迎へ人もない。

獨立の生活戦線

190

私はこゝに初めて獨立の生活戦線に立つのであるが、年は廿一、月給は十三圓、三田を出ると直にその翌日から三井銀行は秘書係、重役附の給仕となつて、下根岸の親戚に居候をしながら通勤してをつたのであるが、その時の秘書課長は西松番君で、今、大阪に棉花商人として百萬長者の出世頭、この西松君がまだ卅そこ／＼で、青森支店長に榮轉、その次の秘書課長は森常太君、私は二代の課長さんの下に、中易寛といふトモ變人で磊落な小童と二人重役附の給仕として、隣室から呼リンがなると飛出してゆく、その隣室には總長三井高保殿、専務理事中上川彦次郎氏のお二人がをらるゝだけで、中上川氏の晝飯は毎日きまつて活版すりのやうに、八州亭からパンとピフテキ、またはチキンコース一皿だけで、それにお番茶だけで質素なものであつた。秘書課で使用する暗號電報に、専務理事は「ウミ」となつてゐる、入社當時「ウミ／＼」と話し合ふのでその意味が分らなかつたが、誰いふとなく、ウミ坊主といふ隠語が出来て、しまひには通用語となつた。その中上川氏のやうなエライ大實業家の傍によし、たとへ、それが給仕であつたにしても學校を出て、直に使はれたことは非常に名譽であると信じてゐる。

私の仕事は、毎週「業務要領」といふ簡單なる記録をする役で、それは、各店からい

191

ろ／＼の重要書類が重役の手元へ来る、その中で、最も必要な事項をその項目だけを一二枚に摘記するのであるが、今でも忘れないのは

一、鐘紡配當金何萬何千圓何月何日入金報告

等と、書いたものである。それを重役の方へ差出すと中上川氏は御覽になつて、朱書で鐘淵紡績會社と叮嚀に加筆せられたが、それは、鐘紡ばかりではない、すべてさういふ風に几帳面に訂正せられるので、誠に恐れ入つた次第であつた。

或時呼鈴がなるので、課長さんが席にをらなかつたであらう、私は、茶坊主のつもりで這入つてゆくと「貸附課長さんに聞いて下さい、私がこの銀行に納めるべき身元保証金の限度と、利息は年一割として、その限度だけ借金するとして、山陽鐵道株を擔保に入れる、借入金の利息を假に一錢何厘とすれば、一ヶ年いくら儲かる勘定になるから」といふ獨言のやうな御命令を私のやうな小童に御説明して、儲かる數字までいはれたのはちよつと驚かされた。私は、直に貸附課長さんに申上げたところ、結局直に實行されたが、さういふことは平氣でをられたのを意外に思つてゐる。

三井家の改革

この秘書課に七八ヶ月勤務してゐる間は、三井家改革の最中であつたから、種々の重大事件をかげながら想像的に實見してゐたが、初め資本金二百萬圓の中、使用人の持つてゐる分が五六萬圓どうしてもまともならない、それを上げたる事情とその二百萬圓の資本金を、さらに五百萬圓拂込濟の合名會社三井銀行に組織を變更した時は、どうしても財産が五百萬圓充實しないので、無理からに五百萬圓にこしらへ上げたのでその當時の三井の財産は、驚くなかれ、さうしたカラクリが必要であつたのであるが、給仕たりともこの小童たゞの鼠でない、チャンとぬすみ見るだけの度胸があつて、重役同様にその祕密を心得てをつたことは、いさゝか會心の笑を禁じ得ないのである。

ニキビ文學へ

かゝる樞機的の秘書課に小童として、雨降りにはツボンに下駄ばきで通勤して上役からお目玉を食ひ、「三井銀行員たるものが洋服に下駄ばきは困る」とたしなめられたこと

もあつたが、大満足で奉公してをつたもの、親戚に居候をしてゐることが如何にも不自由で早く一人前に、氣まゝに暮して見たいといふよりも、書齋のない居候の生活は、勢ひ、讀書原稿に親しむ快樂を奪はれてゐるので、東京を離れての下宿生活に、ニキビ文學への耽溺を味ひたい希望から一日も早く親戚の恩恵を離れて獨立したい、そして、どこぞ知らぬ土地で働きたいと考へてをつたのであるが、その當時、三井銀行は中上川氏の改革初期の時代であつて、先輩または同僚の人々が、入社直に各地支店へ轉勤を命ぜらるゝ辭令を、能筆の大倉、阿部の兩君が毎日々々何十枚か書いてゐるのを傍から實見して、北海道は根室の先まで出張所、派出所が公金取扱ひのために散置されてゐるのであるから、どこへ轉勤を命ぜられるかわからない、幸ひに、給仕たりとも重役のお膝元で働いてゐる役得から、同じ轉勤するならば、關西は京大阪、舊き都や淨瑠璃の浪花津へと、心持ちの折柄、大阪支店から二三人ほしいといふ請求があつたのに割込んで、時の支店長高橋義雄氏の御承認を得てその希望を達したのである。梅田驛から車上の椋鳥となつて、物珍しく兩側の商家を眺めながら、どの道を通つたか、今記憶がない、たゞ忘れられない一大事は、その當時元祿文學旺盛の時代に育つて、西鶴や近松巢林子崇拜の

一青年が「會根崎心中」や「心中天網島」や、道行の文句にあこがれて、美文麗辭をそらんじてゐる。

「戀風の、身にしゞみ川流れては、そのうつせ貝うつゝなき、色の闇路をてらせども、夜毎にともす燈火は、四季の螢よ雨夜の星か、夏も花見る梅田橋、旅のひな人、地の思ひ人……」

「空も名残りと見上れば、雲心なき水の面、北斗はさえて影うつる、星の妹脊の天の河梅田の、橋を鵲の橋と契りていつまでも、……」

「戀なさけ、こゝを瀬にせん蜺川流るゝ水も行通ふ、人も音せぬ丑三ツの、空十五夜の月冴えて、光は暗き角行燈、大和屋傳兵衛と一字書き……」

吾知らず低唱しながらこの會根崎といふ觀念は永年、どんなに私の心を藝術的幻想にふけらしめてゐたことであらう。然るに街の左の側に、ペンキ塗りの古ぼけ洋館の門に會根崎警察署と墨太の看板を見た時、會根崎といふ文字と、警察署といふ文字と、そのあまりに極端なる對照の皮肉さが、如何に、文學青年を失望せしめたであらう、會根崎は地名であるから警察署に冠するに何も不思議はないであらうが、私は、浪花情緒の院

本から得た知識を冒瀆されたやうに厭な心持になつた。それから左に細い横町を折れて軒なみ小さい行燈に、何々と家名の書いてある茶屋の前を通る。こゝが有名なる北の新地であることは勿論知らない。折柄、残暑も夕暮の涼風に、打水を競ふ仇めける小女の上方言葉を、初めて耳にした時の嬉しさ。車夫に運ばれて淀屋橋南詰東入の原何とかいふ旅館に着いたのは、火ともし前であつたと記憶する。

大阪最初の失敗

大阪に着いたその時の失敗を考へると、今、思ひ出しても顔を赤らめざるを得ないのである。それは――

私は、この旅館の川沿ひの座敷に湯上りの浴衣がけ、夕飯をすませて、欄干にもたれて行きかふ涼み船を暫く眺めてをつたが、左手の淀屋橋の上は通行しげく賑やかな様子に、散歩がてら宿の日和下駄をつゝかけて出て見ると、流れの下手は夕日を受けて空一杯茜色に雲彩る美しさ、橋のたもとに繋ぐ數多の小船は、見てゐる間に、次から次と一隻に二三人のお客を乗せて漕ぎ上る、これぞ名物の淀川の涼み船と知つたのは後日のこ

と私は、異境の旅心といふやうな淋しさは少しも感じない、むしろ川沿景色の活き／＼した風情に心をどつて、橋上橋下の大觀に、たゞ茫然と欄干の傍に佇立してゐると四五臺の人力車が、金輪にけたゝましい鈴の音のやうなやかましい響きを立てゝ驅けて來る車上には、京風の舞妓髷に、極彩色の厚化粧、派手な友禪に、赤地金糸の半襟、これぞ繪に見た天女のお姿「あぶない」と車夫は、私の肩をつく、よろめいて倒れると、車上の美人が二三人相顧みて高聲に笑ふのを、私は起き上りながらうらめしさうに眺めて、前後左右を顧みる、勿論知る顔がないので裾の塵を拂うて、そこ／＼に宿に歸つたことを今考へると、はづかしくていやな心持になる。

下宿の同居生活

翌日から銀行に出勤する。これより先、東京を去る時に、本店の秘書課長から注意を受けた。

「大阪へ轉勤した若い奴は、みんな素行が修まらなくて評判がわるい、君も大阪へ行く」と、直に卷込まれるといけないから注意したまへ、幸ひに菊本直次郎君だけは志操堅固

で立派な青年だ、この人に手紙を出して置くから、菊本君をたよつて行きたまへ」といふ御厚意を受けてをつたので、銀行へ行くと、直に菊本君に相談する。翌日から自分の下宿へ来いといふので、本町橋東詰南入川沿ひの、何とかいふ商人宿の二階に同居することになつた。

品行方正で志操堅固であるべく證明せられてゐるところの菊本君は、今や三井銀行常務取締役として財界の重鎮であり、温厚なる紳士としてその兩鬢に多少の白髪を彩るといへども、その當時の菊本君は正に紅顔白皙の美男子、今でこそ金縁の眼鏡はさらにあれど、入齒の金すらも物珍しい時代に、これこそ鏽金ではない眞物の金縁眼鏡にはやし立ての八の字髭、評判の銀行員であつたに違ひない。

私は××××××××する光榮をどんなに喜んだらう、そして品行方正であるところの××君の博文館の大形の日誌を机の引出しから盗み讀んだ時、風流韻事の艶種を明記してゐる彼の大胆さに、どんなにか敬意を表したらう。

年下の私は、さういふ経験がないのであるから、實行方法については勿論無智である、然し、いやしくも文學青年を志し、戀愛小説を書き未だ一度も試みざる花柳社會を

がくほどの横着な、ませた私は、内心、一度ぐらゐたまには誘つてくれさうなものだとうらめしさうに考へてゐる下宿屋の廣い座敷に、獨り取残されて輾轉反側したその翌る日のことである。

「君と一緒にゐると君も勉強が出来ないだらう、どこぞ素人下宿でも探して、お互に、別々にならうではないか」

と、話がきまつて、私は上本町のある素人屋の二階に、菊本君は高麗橋一丁目の炭屋の二階へ、そこには菊本君の自叙傳中に異彩を放つべき繪巻物の霞の幕が展開せらるゝであらうけれど、それは私の書くべき領分ではない。

悪友の交はり

私は大阪において初めて脂粉の香りと女性の温味を覺えたのである。そのころ大阪の三井銀行における同人として、菊本君と、今東洋拓殖の總裁たる高山長幸君や伊澤良立君、船尾榮太郎君、酒井靜雄君、鈴木梅四郎君などであつたが鈴木君は年長者として私達のサークル以外であつて悪友の交渉を持たなかつた。宿直室の花合せは連夜に續いて

その勝負の結果における貸借を庶務課長に届けて置くと、毎月廿五日の月給日に差引加除があつて十三圓の月給が廿圓になる人もあれば、廿五圓の月給が十八圓になつてゐる人もある、天下晴れての博奕が支店長のお耳に達して嚴禁を命ぜられた結果は、北濱の「御野」といふ同人下宿の一室に移つて、夜明かしをするくらゐ猛烈であつたが、全體勝負ごとに興味を持たない私は、ひとり幻想と、薄給との闘争に煩悶しつゝも、籠を放たれた小鳥のやうに嬉々として暮してをつたのである。

私達そのころの生活は一面において放逸であつたとしても他の一面において皆んなが随分勉強したそしてまた無邪氣な行動に終始して楽しんでをつたことも思ひ出の一つである。

高雄の紅葉狩り

秋も半ば過ぎて高雄の紅葉が眞盛りの時、菊本、高山、酒井、船尾その他二三人の同人と淀川の川蒸氣に乗込んだのは土曜日の肌寒の夜であつた。外輪のやかましい回轉音にしばし半眠の夢を覺して、曉の露風にほのぼのと東が白むころ伏見の發着所に昇つ

て、どこで朝飯をたべたか記憶がない京の町をどう歩いたか、それも記憶がない、晝飯ごろ空腹をかゝへて高雄の絶景もうはの空に阪を登つて行くと、上の方から、中上川氏が二十二三の素敵な美人と手を携へて、その左右に高橋大阪支店支配人、小野京都支店支配人や、傳法屋のお豊女將なぞ奇麗首のお取巻を引連れての大名行列に出遭ふと「林間に紅葉をたいて酒をあたくむ——デスカな」と中上川氏がどういふ意味で誰に話されたか記憶がないが、とに角、お聲がかりを受けたことは、私達無上の光榮であると同時に「林間に紅葉をたいて酒をあたくむ」と中上川氏のいはれたこの詩句が、私達同人の間に、凡そ數ヶ月の後まで酒席における美人を侍らす時、いつも、泰然たる中上川氏の眞似をしたものであるが、今ならば、なぐられるやうな傍若無人の振舞を、雜踏せる紅葉狩の群集の前に平氣であつたほど、天下泰平であつたのである。

お妾の強意見

私達青春の時代には社會的制裁がこの方面において寛大であり、その行爲がむしろ野蠻的であつたために、今から考へると赤面至極であるが、その代りまた仕事の方におい

ては随分苦勞してゐる。

この時代の三井銀行は舊式の丁稚上りの番頭のみゆゑ、私達學校出の連中には皆目實務がわからない、教へてくれなくて根性悪くいぢめられたもので、そこで、私達連中だけが、連夜お互に寄り合つて銀行の仕事をイロハから稽古もし研究もして、その實務誌といつたやうな大部の書冊を合作して、それによつて新しく來る學生上りの行員に教へたものである。それは硬い方の話で、柔かい方の話になると、古い三井の信用は、貧乏の行員にまで均霑してお出入のお茶屋へ行くとお金がなくとも、いくらでも遊ばしてくれる。つい深入りをして借金に無理算段をしなくてはならぬ境遇にあつても、別段それが悪いことでなく、若いものには有り勝ちの道樂と許してくれたものであつた。然し私は大阪へ來て一ヶ年間くらゐは、文學的名所古跡をたづねて奈良や京都や、さういふ旅行に氣を取られ、文學や道頓堀の芝居やさういふ方面にも忙しかつたので、花明柳暗の浪花情緒といふやうな氣のきいた遊びには門外漢であつたのであるが、その中に、菊本君は可愛い奥さんをもらつて新世帯を持つ。高山君は、親一人子一人のお母さんが貧苦の中を育て、來た愛着の執念から、子の可愛さだけで、立派な細君をもらつたところ、

が、詩を作り南畫をかくといふやうな藝術味が氣にめさなくて、夫婦仲のよいのに、却つて腹が立つといふ、世間によくある無理解から不縁になると、二十七八の男盛り早くも函館支店長に榮轉して、肥馬に跨がつて五陵廓あたりを乗廻しその馬を吾妻と命じて堂々たる雄姿と艶名とを北海の空にかゞやかすといふやうなローマンスに富んでゐた。その高山君は大阪を去つてゆく、船尾君も酒井君もいづれも新妻を迎へて家庭の人となつたので、一番年若な私は一人取のこされて相變らずの下宿住ひ、菊本君との同居をわかれて以來、六ヶ月目に道修町一丁目花房旅館と背中合せの、兵頭とみといふ或る老人のお妾さんの奥座敷に置いて貰ふことになつたが、この家の主人がお妾だからといつて、若き燕と誤解しては困る、このおとみさんはそのころすでに六十あまり、鍋をかついだやうに黒鬢附をテカ〜と、脂汗ににじませて、べつこらぶちの眼鏡越し、遊んではイケナイ、お金をおためなさいと親代りの意見役、そこに私は明治三十年二月まで足かけ四ヶ年のやもめ暮し二十一から二十五まで、浪花情緒は正に青春の思ひ出、それを書くと際限がないので省いて、面白いエピソードを色どりに添へて見よう。

若沖の鶏の繪

私のこの下宿の隣室に京都の畫師で山本輝山と呼ぶ三十前後の青年が二月毎に來て來ると二ヶ月位滞在して毎日繪を畫いてゐる、山中吉郎兵衛といふ三井銀行の前の骨董屋の老人と、表具屋の儀助さんが、時々來てお話をするだけで、夜分はいつも私と浮世話「この若沖の鶏をこれで二十枚描きましたが、同じものを澤山に描かされると一番肩がこつて困る」

その若沖の鶏の繪は例の若沖特色の長い尾を眞直に上げて一本の足を曲げて一本の足で立つてゐる圖柄であるが、それは四年前に賣る骨董屋の準備行爲で、今關西屈指の美術商山中篁春堂たるものもこの時代にはこの種のインチキは富致の要諦と心得てをつたと見える。この原本の幅が松本重太郎氏に納まつたと見えて、明治三十年酉年の春に、大阪毎日新聞元旦繪附録として發行されたのであるが、正月も半ば過ぎ私は東京に、三井呉服店の重役に榮轉してをられた高橋義雄氏をお尋ねしたところ、床の間に輝山畫伯製山中仕込の若沖の鶏の繪が、かゝつてをるのを拜見して、大茶人高橋箒庵先生も、そ

のころ如何に無邪氣であつたかを、獨り苦笑せざるを得なかつたのである。

私はこの時高橋先生の御盡力と御同情とによつて戀しい大阪を去つて、名古屋支店へ遠島仰付けられたのであるが、後髪ひかるゝ思ひに明治三十年二月、大阪生活のその序幕を涙ながらに閉ぢたのである。(昭和八年一月)

か
る
た
會

明治四十二年の天満焼けと呼ぶ大火事で、北區若松町あたりは跡方も無く一變してゐるけれど、今から三十七八年も前の昔の話、堂島川に沿つた川添ひの二階家、其頃有名な傳法屋といふ宿屋の前から半町餘りも北にゆくと閑靜な住宅地の一廓があつた。小路の左右は棟割長屋の軒つゞき、入口の東西に二階家が對立して居つた三井銀行社宅の其東の家に、鈴木梅四郎といふ墨色も鮮かな木札を仰ぎ見ながら四五人の書生風の青年が格子戸の前に立つた。

冬枯れの川風が松飾りのしめ縄をゆすぶる、うら寒い夜であつた。四五人の書生風の誰々であつたかは判然と記憶に無いが其中に菊本直次郎君と酒井靜雄君の居つたことだけは、此物語りの主人公であるだけに間違は無いと信じてゐる。

鈴木呑天翁が血氣横溢の青年時代であつて三井銀行大阪支店の次席として赴任して來られて越年した初めてのお正月である。下宿住ひの書生上りの巢立つて間も無い連中を集めて、お屠蘇の御馳走から花がるたに春宵の一夜を遊ばせやうといふ催であつた。其

頃の私はニキビを氣にする文學青年であつて、銀行の小僧としては氣乗りのせぬいたづら者であつたが、これより先、呑天翁がまだ時事新報大阪支局記者としての貧民窟探險記といふ南巷長町の記事を読んで、今の言葉で言ふならば社會政策研究の第一人者といふやうな態度で記述せられた讀物に心酔して居つたのであるから、平素店内にあつては事務上のお話か、浮世話としても其時から既にく頑固を看枚にして居られた呑天先生に對しては餘り御高話拜聴の機會が無かつたのであるが、不圖、貧民窟探險記に就て此夜の席上、私の質問がお氣に召たと見えて、それから其當時の苦心談と氣焰とに私達青年の心を躍らせる訥々たる其雄辯は、或は此時から國民黨代議士の萌芽がきざして居つたかもしれない——其面白いお話の最中に、美人が二三人、靜に襖を開けて現はれたのである。

良家の處女、鬼も十八番茶も出花といふ年頃の御令嬢に對して禮儀も知らなければ、お話しすることすらも覺束ない野生の一群の中に、貴公子のやうな菊本君だけは金縁の眼鏡に色白のやさ男、平素裕福の生活から斷然一頭地をぬいてのモダンであつたが、此菊本君だけが自分の定期預金から引出して五分利の整理公債を百〇四圓八十錢で何百圓

か買収するといふやうな豪勢な若旦那様に對して平素から指をくはゑて羨望してゐる連中から見ると、まだ紅葉山人の金色夜叉といふ小説は此世の中に生れぬ先であるから、誰がお宮で誰れが貫一で、そして何人が富山の役割に當るやら其點は不明であるが、此夜のカルタ會のにぎやかさは下宿生活の銀行小僧達にどんなにか恐慌を起さしめたであらう、其時の語り草が今尙私の腦底にきざみついて居るのでも判ると思ふ。

「お咲さん」

と呼ぶ御令嬢の名前だけを覚えてゐる、小作りの瓜實顔の可愛らしい娘で、それが鈴木夫人のお妹御であつたやら、お知り合の御令嬢やら其點は少しも記憶がない、指折り數ふれば此お嬢さんも昭和七年の今日になると五十五六のお婆さんになつてお孫さんのお世話をして安樂な餘生を送られて居られるかもしれない。

私達はお互に經て來た一生の歴史の中に何等か印象を残すべく其夜のカルタ會を語り合ふてどんなにか呑天先生に感謝して居つたらう。

然るに、それは偶然から、ある一人の男の不平話が、忽ちに私達の間にも一大波瀾を卷起したのである。

「君、先達の晩鈴木君によられたあのカルタ會ね。あれは、あのお嬢さん方の婿選みで菊本君が候補者ださうだ。菊本君だけがイヤに一人洒落て居つたらう、其理由が茲に於て明瞭であると言ふべしだ。畢竟僕等は、刺身のツマに利用されたのだよ、馬鹿々々しいから、君、菊本に奢らせるか、然らざれば、だ、も一度鈴木君の御馳走にならなければ埋合せがつかないと思ふ」

「賛成々々」

「動議が成立したやうだ、異議がなければ、實行せしむる手段を研究しやうではないか。」と言ふやうな冗談に花も咲いたけれど、それがどう具體化したか、或は其儘泣寝入になつたか、其邊のことは今になると記憶に残らないければ、その花婿と目ざされた菊本君がお斷りしたのやらお咲さんと呼ぶお名前のお嬢さんが恥しがつてお逃げなすつたのやら、其邊の事は皆目判らない。只だ漠然と、若き女性の名前だけをはつきり覚えてゐる青春の戀心を思ひ浮べて微笑を禁じ得ない自身を顧みて、此機會に於て依然として嬰鏢壯者を凌ぐ、我呑天先生の御健康をお喜び申上度いのである。（昭和七年四月一日）

桐
畠
の
怪

「私の家は、湯澤温泉の一番眺望の佳い高見に在つて、大野屋といふ温泉宿です。眼の前に、吉田富士が一寸頭を見せ、魚野川の瀬が山の麓を白く流れて、直ぐ眼の下には杉立木の鎮守の森と東電の発電所があります。今、清水越えから上州の山越しにトンネルの大工事中ですが、これが出来ると、東京から六時間で行けます。夏は涼しくて、とても景色のいゝ湯の町よ。」

さう言つて、いつも自慢してゐる玉子の實家を、ふと、内偵して見たくなつた慶應ボーイの太田は、むし暑い眞夏の宵を、上野から新潟行の夜行列車に乗込んだ。

楽譜と、浴衣と、手廻はりの旅行用具を入れた大形の折カバンに、ギター入のサツクを携げて、制服に麥ワラ帽子、身軽な服装である。

翌る朝の七時、北越の涼風に面を吹かれて長岡に着く。直ぐ湯澤温泉行の小型の汽車に乗替へて靜に流るゝ信濃川に沿ひ、川口から魚野川を左に見て廻ること、二時間あまり、

「裏山の陰に白い雪がいつ迄も残つてゐる。その雪がなくなると、お米が黄ばんで、秋風がそよ／＼と吹く。」

と西條八十崇拜の玉子は、いつも詩人めいた故郷禮讃をやつて、それから、きまつてしく／＼と泣き出す……太田は今、それを思ひ出して、その夏山の雪が、玉子の言ふ通り行く手の山の澤に、ところ／＼白く光つてゐるのを眺めながら、湯澤の停車場に降りたのは、日盛りの十一時過ぎだつた。

「湯澤温泉の大野屋つて、どこですか。」

「湯澤温泉はあそこだが、大野屋つて知りませんな。」

と指さして教へてくれた左手の山の中腹に、七八軒の二階造りの宿屋めいた一構へ、山の頂から引いた長さ百五十間もあらうと思ふ二本の水電鐵管の眞下に、堂々たる発電所の建物、それに沿うて上つてゆく爪先上りの坂道である。右に老杉の鎮守の森、左は青田の落し水にさゝ濁りの養魚池と覺ほしく、緋鯉真鯉が、ところ狭ま／＼泳いでゐる。

「成る程玉子の言ふ通りの景色だ、大きな杉の森だ。」

と暫く道端の杉の根元に腰をおろして、汗を拭いてゐると、湯歸りの村の人と見えて、

濡れ手拭を頭にのせた朴訥さうな親爺さんが通る。

「大野屋つて温泉宿はどこですか。」

「大野屋？ 知らんな、そんな家は無いし。」

「藤本といふさうですが。」

「うん、藤本？ 甚平の家か。甚平なら温泉宿ぢやない。その共楽館の横の百姓家だ。」

「いゝえ、たしか、温泉宿といふ話でしたが、その、大野屋つて……その藤本つて……東京に娘さんが……」

太田は自分でも何だか分らぬ事を言つて、気がつく、ちよつと躊躇つた。

「東京に娘さんが……知らんテ。藤本甚平なら、正直な男だが、氣の毒な人だ。女の子は澤山あつたが、可哀さうに、みんな取られてしまつてな。」

やつぱり要領を得ない。仕方がないから又坂路を上つてゆく。上りつめた處に、見上げるやうな新築の三階造り、「湯澤ホテル」の五字を斜めに見て、それから軒毎に尋ねて見たが、大野屋なるものは見當らない。

共楽館の横の百姓家、藤本甚平といふ家は、南を桐畠に遮つて、見すばらしい石コロ

屋根の傾きかけた軒端に、古びた葎簧が三枚ならんでかけられてゐるので、奥は見えない。森閑として、日ぐらしが啼いてゐる。

「御免なさい、御免なさい」

幾度もく／＼呼んで見たが、答へがない。その中にお腹はすいて来る。太田は暫らく、佇んで何を考へるともなく、茫然と眼を石垣から屋根傳ひ、今を盛りの南瓜の花に遣ると、四五疋の蛇の唸りが夢の世界に誘うてゆく。太田は大地に足を投げ出して、腰をおろした。

モンペイをはいた素足の十三四の小娘が、太田をジロ／＼見て通つた。金紗の御召に騰脂色の帯を胸高にしめて、尻下りの細眉に口紅の玉子のモダンも、嘗てはかうした時代があつたに違ひないと、不圖思ひ出し笑ひが出て、そこで初めて我に返つた時眼の前の共楽館に、一先づ落附くことに決心した。

晝飯には鯉のおさしみ、途すがらの養魚池を思ひ浮べて、箸を出す勇氣も出なかつたが、湯へ這入つてから、ぐツすりと一寝入、眼が覺めて見ると、西日は既に裏山にかくれて、青葉傳ひの冷かな風が、八疊の部屋を吹きぬいて、床も取らない坊主枕に大の字

の壯快さ、暫らく天井を見詰めてゐた太田は、それからそれと玉子の事を思ひ浮べるのであつた。

二

赤坂の葵ダンスのスター、醫の玉子は、色白の肌さはりの滑らかな、小粒ながら可愛らしい文學好きの女である。まだ二十になるまいと思ふ。いつも『令女界』と『新青年』との愛讀者で、音樂の素養があるらしく、太田との交際は、彼女が一番秘蔵のマンダリンの話から共鳴したに始まる。無邪氣な、あど氣ないおキャンを賣物にして、チャールストンが得意の愛嬌もの。どんな事でも話すけれど、其生國や生ひ立の身の上話は、太田より外に誰一人話したことがない——と彼女は言ふ。

「この話、貴方一人だけよ。あたし、貴方より外に、こんな自分の恥になるやうな身上話なんか話したことはないよ。だから誰にも言つてはいやよ、屹度よ」

と念を押したあとは、屹度しく泣出すのである。

たゞ湯澤温泉の大野屋の娘であるといふより外には、何の興味も波瀾もない平凡な身

の上ばなしである。その温泉宿の小娘が、どうして東京へ出て來たか、それから、どうしてダンサーに迄なつたのか、悲しい運命の戯れに就いて、そのロマンスは、未だ嘗て一度も話したことがない。何が悲しくて泣くんだか、分らないのである。

それよりも、頬紅に幾筋かの涙が流れて、それが深い靨にたまる、甘い水晶の寶玉を小指の先でつぶすのが、今啼いた鴉の笑ひ話となるだけだ。……が、その中にたつた一つ太田の耳の底に残つてゐる話があつた。

「越後つて私の生れ故郷、それは可笑な所なのよ。冬は雪が降つて、この軒先より高く積つてどこへもお遊びに行くことが出来ないでせう。だから皆な圍爐裡か、炬燵にあたつて、丸三月、全く炬燵生活なのよ」

「羨しいね。さうすると、玉ちゃんの足と僕の足と、其間黒の中で接觸するんだね」

「アラ、いやだ」

「だつて朝から晩まで炬燵の中に這入つて、そこで御飯もたべれば『令女界』や『新青年』も讀むんだらう。さうすると、その三ヶ月の長い冬籠りの間、男と女の仕事は戀愛そのものゝ充實だらうぢやないか。」

「いやな人、だから貴方は……あの冬に越後に行つてはイケないことよ。冬ゆくのは罪悪なのよ」

「冬行つて見たいね」

「冬行つてはイヤ」

「行く」

「行つてはイヤ。イヤツてば」

と言ひながら、又しく／＼泣き出したことを思ひ浮べて、太田は、なぜ夏休みに来たのか、冬来ればよかつたにと思つた。

三

夕飯の時、お給仕に來た四十餘りの宿のおかみさんに聞いて見た。

「大野屋つて宿屋は、今はないんですか」

「こゝでは私のうちが一番古いのですが、大野屋つてのは知りませんね。尤も、長岡には、大野屋つて、大きな温泉宿があるさうですけれど……」

「こゝの温泉宿に、藤本といふ家はありますか」

「藤本？」

「娘の子を東京によこしてゐる……」

「あッ、甚平の娘、あの子、東京に居るのですか、何をして居ますか」

「おかみさん、その娘さんを知つてる？」

「甚平の子の玉子ちゃんなら能く知つて居ますとも」

「あゝ、その玉子、玉子。……いくつ位ですか」

「かうと、去年……一昨年の冬、十八か九でしたから、今日でははたち位になりませうか」

「二十歳、それに違ひない。どこの娘さんですか」

「直ぐこの横の百姓家の甚平の娘でしたが……あの子では、私んとこ實に困りましたよ」
「どうして？」

話の筋はかうである。東京の某青年小説家が、正月休み前からこの共楽館に遊びに來て居つた。二階の一番よい座敷の炬燵の中で、毎日萬年筆に原稿かせぎをやつてゐたが、

或日、ふと雪の中から湯通ひの玉子を見下したものである。

玉子は丁度隣村の石打の大百姓で小學校の先生をしてゐる男の處へ容色好みで貰はれてゆくといふ婚約が出来て、雪が解けて春が來たらお嫁入をするといふ時であつた。

どう云ふ風に、この小説家と玉子との間にわたりが出来たものか、二人は人の知らぬ間に親しい交際をするやうになつたが、結果は、お定まりのかけ落ちといふ一齣にとぢめられた。

親の甚平は、石打の旦那に申譯がないと言つて狂氣のやうになつたが、可愛さうに其後は、生き甲斐もない暮しをしてゐる――

話の半ば頃から、太田は、小説家某をして一躍大家の名を成さしめた名作『湯の宿』の一篇を思ひ浮べて、急に藤本の甚平に遇つて見たくなり、桐島山の百姓家に、只一つ薄暗くかどやく電燈の光をすかして見た。

四

剃刀もあてぬ白髪交りの頸髯が五六分のびた、やせこけてヒョロ長い爺が、獨身の心

まかせの夕餉をすませて、縁の柱にもたれ、破れ團扇に藪蚊を追うてゐる横顔を、桐島の黒く繁つた廣葉の間を漏れて來る十三夜の月が、青白く照らす時、

「御免下さい、藤本さんのお宅はこちらですか」

甚平は立上つてジツとすかして見る。

「誰れだ？ 用があるならズツとお這入り」

起たうともしない。

「あの、私は東京から……」

「東京から……」

と言つたかと思ふと、つか／＼の太田の傍へ寄つて來た。

「なんだ、男かい……」

甚平は桐の葉蔭の月明りに、太田をジツと見詰めた。

「何んぢや、子供ぢやないか」

宿の大柄な格子縞の浴衣を着た太田は、如何にも子供らしく見えた。

「子供ぢやありません、學生です」

「どこの書生さんだ」

「東京です……」

「東京は、判つとる」

「僕は、東京ですけれど、神戸のものです」

「東京の神戸か。何しに來なすつた？」

「夏休みに、北國を見物がてら……」

皆まで聴かず、甚平は先を奪つて、

「玉子のお使ひか。玉子にたのまれてか」

「玉子さんは知つて居ますけど……」

「たのまれて來たな。よし。だまされてもよい。あがつてくれ」

二人は、南向きの風通しのよい、藁敷きの圍爐裡の側に向ひ合つて坐つた。

圍爐裡には、木の根の大きなのが白い煙を吐いて燻つてゐる。十燭位の電燈がたゞ一つ、隣の土間の堺にうす暗くかどやいてゐる。

太田は暫く黙つてゐた。甚平はスツと起つて、正面の佛壇から一つかみの手紙を持つ

て來た。

「これ、知つてるから」

「手紙ですか」

「手紙だ、玉子の手紙だ」

「イヤ、知りません」

「知らない？ うん、さうか」

「手紙のことは何にも知りませんが、玉子さんから何か言つて來たんですか」

「さうだ。言つて來たんだ。えらい事を言つて來やがった。東京へ行つてから、珍らしく初めて手紙を寄越したと思ふと、一週間目ぐらゐに立てつゞけに四本も五本も寄越してね……それが、この……」

と言ひかけてポロ／＼と涙聲になる。

「不孝ものめ、一人の親を放ツばらかして、そしてこの桐の木を切れなんかと言ふのぢや。此桐の木はな、お前さんは知るまいが、……此桐の木はな、このおやぢが魂を打込んで育て、來たのでな、深い／＼譯があるのでな……」

と甚平は、うす汚い浴衣の袖でそつと涙を拭くのである。

五

この界限の昔からの習慣で、女の子が一人生れると、きつと桐の木を二本植ゑることになつてゐる。二十年経つと、その桐の木をお金に代へて娘の嫁入仕度にする。甚平は物堅い性質から、女の子の産れる度毎に、五本の桐の木を植ゑて来た。長女が生れた時にも五本、次の女の子にも五本。

その十本の桐の木が、どういふ譯か、次女が生れて三年ほど経つ時、長女の分が二本次女の分も二本、一夜のうちに青い潤い葉が黄ばんだかと思ふと、もう立枯れの様子が見えて来た。二本枯れると其女の子にも不幸が来る——と昔から言ひ傳へがあるので、甚平夫婦は非常に神経を病んで居つたが、その甲斐もなく、四本とも、とう／＼枯れてしまつた。その翌月に三女の玉子が生れたのである。

甚平は玉子のためにも、また五本の桐の木を植ゑた。そして長女次女の枯れた分の補充として、頃合の桐の木を四本植ゑ足した。十五本の桐の木が漸く揃つたが、甚平夫婦

の心は、やつぱり安んじ得なかつた。

「甚平の桐の木も、とう／＼二本づつ枯れた。可愛さうに屹度二人とも死ぬにきまつてゐる。昔からの明神さまのおさとした。どうすることも出来まい。可愛さうに」

さうした陰言が事實となつて、翌くる年の春と秋とに、長女も次女も相次いで死んだのである。枯れた桐の精に憑かれたんだと、土地の人は言ひ合つた。

でも、十五本の桐の木は、勢よく新芽を出して、毎年一尺五六寸も延びて行つた。軟い潤葉が重なり重なつて、涼しい緑の陰が狭い畑を一杯に蔽つた。

それを、甚平は、せめてもの慰藉に思つてゐると、その桐の木の双股の處に、凄いやうな光りものを、ふと闇の葉越しに見付けた甚平の妻は、急に氣が變になつて物狂ほしい状態になつた。

「あの桐の木の蔭に娘が迎へに来てゐる……」

妻は夜な／＼そんな事を口走つた。

「そんな馬鹿氣たことがあるものか、氣の迷ひだ。しつかりしてくれよ、イ、かい。何にも見えないぢやないか」

と甚平がたしなめても、どうしても聴かない。

「そら、あの桐の双股の枝の所に、娘が迎へに来てゐるぢやないかね」

「どれ、どこに」

甚平は闇の空を葉越しにすかして見ると、そこに青白い光の玉が、見えたり、軽く浮ぶやうに、風のまにまに明滅するのである。

甚平は翌る朝早く一人で桐畠に行つて、双股の枝を根氣強く調べたけれど、そこには何にも見當らなかつた。蟬のぬけ殻が二つならんでゐるだけだつた。

六

傳説の力は恐ろしいものである。そこに自ら招く神経作用が手傳つて、二人の娘が死んでゆくと、娘の母は又いと弱い女心を痛めて、物狂ほしい状態で、長いこと病床についてゐたが、玉子が五ツになつた時、とう／＼娘の後を追うて逝つた。

甚平は僅かばかりの自作農を働いて、玉子を男手一つで、十四の春小學校を優等で卒業させる迄の苦勞は、並大抵のものではなかつた。

甚平が村中での評判のものであると同時に、掃溜に鶴が飛降りたやうに、賢い美しい玉子は、近所近在のほめものであつた。唱歌と作文の得意な彼女は、文學少女として早くからませてゐた。河原撫子といふペンネームで、少女雑誌への投書家であつたなど、如何に甚平を驚喜せしめたであらう。六日町の高等女學校に十七の冬まで勉強して居つたが、翌る年の正月、隣の共樂館に泊つて居つた青年と逃げて行つてしまつてから、甚平は人が變つたやうに老はれて、玉子の行方のみを探して居つたのである。

それ以來といふもの、一度も手紙をよこしたことも無いので、随分さがして見たが、皆目行方がわからない。警察の人の力を借りて、その小説家だといふ男にも問合せて貰つたが、梨のつぶてと何の音沙汰もない、……が、まだ此桐の木が青々と、かう繁つてゐるから、玉子は無事にあるものと、俺は安心はしてゐるものゝ、今頃はどこにどうして居るであらう。さう思ふと、心の迷ひか、丁度先月の今日のやうな月夜の晩、この桐の葉越しに、見るともなしに見ると、不圖、双股の枝に、かくれたり見えたりするいつもの光が出はじめたので、あゝイヤなこつた、また何か悪いことでも起りはせぬか知らと恐ろしくなつて其晩は早寢をした。だが、中々ねつかれない。明け方近く、やつと寢た

と思ふと、眼が覺めて見れば朝日が枕元にさし込んでゐる、その傍に、始めて此手紙が一本……」

と言ひながら、甚平は、赤地に麻の葉模様を淡く刷つた小さい状袋を見せた。

太田はハツと思つた。いつも玉子が、裏の方の白地に宛名を書いて寄越す、それである。

「お前さん、この手紙を知つておいでか」

「この手紙は知りませんが、玉子さんのお手紙はよく知つて居ます……」

「玉子の手紙を知つてる？ 此手紙の中のことでも知つてるか」

「知りません」

「知らない？ 眞實か」

「眞實です」

「それから又此の手紙が一本、一月の中に丁度これで四本だ」

と、一々色替りの模様刷の状袋を太田の前にならべて見せた。

「どの手紙も、みんな同じことだ。が、わしは玉子の爲めに此の桐の木を今日切ら

うか、明日切らうかと、實は思案にくれてをるのぢや。お前さん、ほんとに知らないのか」

甚平は恨めしさうに太田を見詰めると、にじみ出すやうに、皺苦茶な頬を、涙がとめどなく流れるのである。

七

「十五本の桐の木が、揃つて立派に育つて來た。それだけ俺は不合せなんだ。娘が順當に嫁入つてさへ居れば、この木も段々に片付いて、もう一本も残つて居らん筈だ。それが揃ひも揃つて、一本五十兩もしようと思はれるほど大きくなつたのが、結局わしには怨めしい。わしは腹が立つ。切るべき時に切つてこそ合せなんだに……さうだ玉子、お前が結婚の費用に切つて呉れと言ふのは本當だ。よし、お前の望み通り切つてやるぞ。何本切らう……五本……イヤ、面倒臭い、みんな切つちまへ」

甚平は狂氣のやうに立上つて、桐畠の中を足にまかせて駆け廻るのである。

「オヤ、何の光りもないぞ。お前達の魂は、生靈は、さうだ、安心したのだらう。よし

切つてやる／＼。明日きつと切つてやるぞ」

と、いつもの双股枝のあたりを、のぞくやうに見詰めて、

「玉子、お前の言ふ通りに切つてやるぞ」

甚平は、太田の前にもどつて、ジツと坐つたまゝ、暫らく無言でゐたが、

「お前さん、書生さん、わしは、屹度あした、此の桐の木を切つて見せる。いゝかい、安心しなさい」

「僕は、手紙のことは何にも知らないですよ」

「手紙のこと、さうだ、早く知らせてやりたい。いゝかい、書生さん、この親爺が承知したと、屹度言ふのだよ」

太田が氣味わるくなつて、黙つてると、甚平は、突然、太田の腕を引張つた。

「あッ」と言つて、太田は覺えず身を縮めた。

甚平は構はず、力づくで引寄せて、

「そら、あすこに、見えるだらう。娘達の生靈が——青白く光つてる。そら、動くだらう。双股枝の葉がくれに、青白く、そら、黄色く。さわ／＼と音がする。娘の黒髪はや

うだ、能く見い、そら……」

太田は恐怖に襲はれながら、それでも其方を見ると、併し、何も見えない。

「何も見えないぢやありませんか」

「見えない？ 見えるがな、そら、あの枝のわれ目に」

颯と涼風が音づれて、黒く濃い桐の青葉の重なり合ふ遙か遠い彼方に、発電所の二百ワットの電燈の光りが輝いてゐる。

「あれア電燈ですよ」

「なに、電氣。馬鹿を言ふな。電氣ぢやない、娘達の生靈だ。そら、たしかに、そら、動くだらう、葉がくれによ」

「葉がくれに、遠くの電氣が見えるのですよ」

「さうぢやない、娘達の魂だ、よし切つてやる、玉子、お前の結婚の費用は俺が送つてやる。お前の望み通り桐の木を切つてやるぞ」

甚平は追々と聲高に語るやうに言つて、四本の手紙を鷲掴みにして、さめ／＼と泣くのである。

太田は、いよく堪らなくなつて、いくら分らず有たけの紙幣を、むき出しのまま
甚平の前に置くと、

「桐の木は、切らないで下さい。切らなくていいです。」
と言ひながら、逃げるやうに飛出した。ねぐらを亂された蟬の羽音をあとにして。

(六年十一月)

數字と國富

總べてのことが「數」に還元されるやうな世の中である。一例をあげると、物理學でさへ數學化して、物理學から物質と云ふ觀念を追ひ出し、單に方程式のみを保留させると云ふ由々しい問題を生み落して居るので、これには物理學者自身も、怯え物理學の危機とも叫ばれるに至つたと云ふ話を聞くが、數字はそれくらゐ純眞無雜なものである。

だからこそ、科學者によつて寵愛もされ、研究の方便ともされるのであらうが、經濟界のことになると、元々が數字が土臺なのであるから、數字は、一層、重用されねばならない。數字を寵愛することが、假令、物理學の危機となつても、經濟學の危機にならない。さうかと云つて、濫用することには賛成出來ない。會社資本と國富とを結付け、會社資本の増加をあげて國富増進の指標とすることも強ち間違ひと云ふのでないけれど數字をもつて國富の増進を説いても、それが全部眞實にふれてゐるとは云はれない。亭主が借金をひた隠しに隠して置いて、貯金帳のみを見せて女房の歡心を買ふやうなものだ。亭主が死んだら、貯金どころか差引き借金が残つて、女房、子供をかゝへて途方に

くれたと云ふ話も世間にないことではない。會社資本も同じことだ。あの中には信用作用によつて拂込まれた借金も含まれてゐる。會社の重役とか大株主とか云つて威張つてゐた處で、自分の持株を用算符の中に仕舞つて置けないのが通例である。

だから、會社資本の増加なんかで直ちに國富増進の指標として示すことは穩當でない。いやしくも、國富と云ふやうな純資産の算定には、種々の經濟的要素にわたつて計算の必要があるが、概括した處でも現代のやうな信用組織の發達した國家社會では、プラスの數字と同時に、マイナスの數字も計算しなければ本當の結論が得られない。世界大戰の當時、獨逸の、あの有名な經濟學者で大藏大臣だつたヘルファースと云ふ男が、マイナス勘定を忘れ、プラス勘定の數字ばかりで、獨逸の戰時財政を賄つて大味喰をつけた例があるが、あばたも靨で、プラスの數字のみを見て國富を云々することには非常な危險が伴ふと思ふ。尤も當今の統計學者で、そんな馬鹿氣たことをするものはあるまいけれども——。(十年六月)

怪奇を見た話

僕は元來、無宗教で、それに、今時幽霊があるなど、信じてゐるほど非科學的な人間ではないが、しかし、幽霊、所謂幽霊と人がいつてゐるやうな意味での、幻覺といふか何といふか、まあ、そんな意味での經驗ならぬこともない。

時は今から十五六年前の、僕が四十五六の頃かね、丁度、今頃の青葉どき、雨の多い初夏——と、話してくると、一寸小説じみて来るが。

大阪の僕の所へ、故郷の親類に當るお婆さんがやつて來た。このお婆さん、随分若い時から後家となり、それにお婆さんの娘にも孫にも不幸が續き、長い間、淋しい頼りない獨身生活を續けて來た人で、僕も随分同情し力にもなつてあげ様と常々思つてゐたんだが。

久し振りの對面で、色々もてなしたあと、

「お婆さん、何處かへお連れしませうか」と僕が誘ふと、高野山にお詣りしたいといふ。それは、おやすいこと、早速二人で出掛けた。

その頃は、未だ汽車も吉野口までしかなく、そこから駕籠で昇ることになつてゐた。僕たちは、御山では清常正院まで行つて、そこで泊めてもらふことにした。

大阪を出る時から、どうも氣になる天候だつたが、駕籠で山に昇るころは、ポツリ／＼やつて來たし、僕たちがその僧房に着いたころは、大變な雨、それに風さへ加はるといふ始末、二人で、途中でやられなくつてよかつたと、話しあひながら、夕食も終りさてこれから寝ようといふことになつた。

一體、かういふ所では、宿賃といふものをとらない、その代り供養料といふのがある一人前大抵五圓、それから十圓ぐらゐまであるんだが、其時も、坊さんがやつて來て、明朝はどなたを供養なさる、とかう聞くんだ。僕は、二十圓も拂へばいと考へてゐたからお婆さんに、あなたは誰の供養をするかと、聞くと、婆さんは、自分のすつと前に死に別れた亭主と娘と、娘の一番上の孫にしようといふ。

今度は、僕の番だ。僕は極く簡単に、自分の兩親と祖父母とだけに極めたんだな。

その時、さう坊さんに依頼した時に、フト胸をかすめたものがある。大體そんな時、急に思ひ出すのからして、妙なんだが、どういふもんか、一人の男の名が浮んで來たん

だ。坊さんに一切を頼んだあとで、突然頭を持ち上げて来た男の名、顔が、變に腦裡にコビリついて離れない。さうかといつて、その男まで坊さんに供養を頼まうなんて、口までは出かゝつてゐたが、どうしても云ひ出せない。

尤も、その男は、色んな意味で、その數年僕の記憶を去らなかつた忘れ難い知り合でもあるので、フトさうした瞬間に、思ひ出されて来た事も、強ちに不自然でもないんだが。その男といふのが氣の毒な人で、大磯で死んだ、僕の親戚の一人。その頃から七、八年前に、僕が死に目に會はないで、死んでしまつたのが、それ以來何となく残念であり氣の毒な氣もしてゐた。

だから、その男のことが、供養と、いはれて、思ひ出されて来たことに何の不思議もないんだが、何故か僕がその男を入れても供養代卅五圓もあれば充分で、何でもないとやすい仕事なのに、いや、止さう、と、キツパリ、思ひ止まつた所に、今から考へると妙な、考へやうによつては、靈妙なものがあつたんだな。

廣い僧房には、たつた二人切りの客。それでなくとも、屋内が陰氣な所もつて、来て益々激しい大雨、流れの溢れ亂れた近くの河の音、それに風のため、僕たちの部屋の

雨戸に何か々當るカタン／＼といふ音。

兎に角、疲れた軀を床に入つたのが、かれこれ夜中の、一、二時頃だつたと思ふ。

床へ這入つたものゝ、どうしても、最前の供養に入れなかつた男のことが、それを止めてしまつた自分の氣持の不快感が、さうしてそれから来る自責の、後悔の念が、眼を冴えさせる一方で、仲々に眠れなかつたが、その中に、いつか、旅の疲れで寝入つて了つた。

と、暫くして、急に胸が苦しくなる、グ／＼胸にのしかゝつて来るやうな、息苦しい重みを感じられる。誰かが、首をしめつけてゐる兩手に力が段々と加はつて来る。ああ、たまらない、苦しい、と思つて、僕が、前の方を見るときもなく見た。例の、大磯で死んだ男が僕の眞正面に坐つて、チツト、青い顔色の中の、陰氣な目で僕を睨みつけてゐるのだ。

僕は、思はず、アツと叫んで、逃げようとするのだが、動けない。足がすくんでゐるといつて、例の男は、たゞ正座したまゝ、別に追つて来るとも思はず、其死んだ時の形相かと思はれる、物凄、無氣味なねばり強さでジリ／＼と僕に迫つて来るばかりだつた。

と、その時、僕は、心の中で、「あゝ悪いことをした、きつと君の供養もするから」といふ氣持で、低く口の中で呟いたのだね。

が、男は少しも動かさず、僕を睨みつゞける、もう、駄目だ、救けてくれと、苦しみの餘り何か大聲に、僕が聲をした時、雨戸の外で大きく、ガタンといふ轟き、(風が何かを叩きつけたのだ)それと同時に、僕の名を呼ぶ同行のお婆さんの聲、ハット目がさめると暫くは、口もきけないぐらゐ、息苦しく、夢とは信じられない怖しさで、眞青になつたまゝボンヤリ周囲を見廻してゐた。

しかも、その時、僕は床に寝てはゐなかつた。床の上で、最前夢に見た男の幻のやうに、端坐してゐたのだ。それで見れば、僕は恐らく、夢の男のやうに、夢の中でも、薄氣味悪く、チツト兩眼を開いてゐたらう。さう考へると、體中に、ソツト寒氣を催して居ても立つてもゐられない氣持だつた。

勿論、その朝は、お勤めに行つた時は、供養の中に、故人を加へ、宗教心のないこの僕が、本心から、誠心誠意、お祈りをした。

同時に、昨夜來、心の中に、わだかまつてゐた、暗い影が一扫されて、初めてスガ／＼

しい氣持になる事が出来た。

更にも一つ、僕が夢からさめやうとした刹那に、雨戸に大きな音を立てたものがあつたのを思ひ出して、縁先に立つて見ると、成程前夜の大雨のために、樋が外れて、それが風で激しく戸に當つたことが知れた。

一應は「幽霊の正體見たり枯尾花」で笑つてすまされもするんだが、夢の中で聞いたあの物凄い轟、それに目の覺め様とする瞬間、など、餘り符合しすぎてゐるので、僕は不吉な思ひ出に、矢張り、笑ひ去る事は出来なかつた。(昭和八年七月)

私から見た私

一月二十二日の朝歸阪して見ると、「サンデー毎日」から「私から見た私」といふ題で回答を求められた。往復ハガキの通信であるから、頗る簡單で意を盡さないのが残念であつた、二十四日の朝上京して見ると、文藝春秋社から、二十五日迄に、此度は是非書けといふお手紙に接したので、こゝにいふ機會を利用しなければ、恐らく再びこゝいふ問題に觸れることはあるまいと思つて、喜んで書かせて貰ふことにした。

此世の中に私位、幸運な人はあるまいと信じてゐる。若い時から我儘で、放縱の生活をして、傍若無人に暮らして來たにも拘らず、憎まれつ子世にはびこるとでも言はれそう、私の仕事は大體に於て成功してゐる。家庭は圓滿で、五人の子供は順調に成育して、長男には嫁もあり、長女は嫁入つてトテモ可愛い孫が二人ある。次男も此春には結婚する。三男と次女は宅に在つて學校に通つてゐる。いまだ嘗て一度も凶事に見舞はれた事がない。お佛壇もなければ、亡き母の五十回忌を郷里で營んだより外に、線香臭い供養の經驗は無い。餘りに運がよいので、老來何か、此反動に襲はれはしないかといふ

様な恐怖が……丁度黄昏時に田舎道を獨りぼつ／＼と歩くと、自分の足音が氣になつて振りかへつて見たいやうな心持がすると同じで、いさゝか淋しいやうな事もある。但し、歡樂極まつて哀情多しとは少し意味が違ふやうに思ふ。通俗にこれを佛心が出たと言ふのであらうか。よせばよいのに世話をして五月蠅がられたり、親類の不幸の人々や世話をして居る若い連中の事が氣になつておせつかいを仕すぎるのではあるまいかと、過ぎたるは及ばざるが如しと感じて、手控へる事がある。妙に神経質になつたやうに思はれる。全體私の短所は、輕卒でそれがどう響こうと、對手方が、それをどう感じやうとそゝいふ事には無頓着に、端的に直に結論に達せしむるのであるから、持つて廻つて、四方八方をうまく収めてそれから徐ろに計畫を大成せしむると言つた様な、深慮遠謀は藥にしたくても無いので、見たまゝの、ガラ／＼と、開け放しに、善惡可否を露骨に明言し得る、盲目蛇におぢない勇氣があるから、淡泊と言へば言へるかも知れないが深く交際^{つちあひ}ふ迄は其多くは誤解を受けて暮らして來たのである。幸運なる私は、私の事業に於ても二十年來殆んど獨裁專制でやつて來た。其獨裁專制に於て大過なきのみならず、時代の尖頭を進み得た第一の理由は、私の方針が假に間違つて居つたとしても、どこ迄も

それを成し遂げ得る迄、私の同僚と其一黨の諸君が、是が非でも助けて呉れたからである。之に反して、如何に名案良策であるとしても、一致協同の精神が無いのみならず、影からケチをつけて失敗せしめやうとする世間の多くの寄合世帯を大觀する時、私位思ふ儘に仕事を實行し得る位置に、泰然として居り得る人は殆んど稀であると感謝してゐる。そういふ唯我獨尊で威張つて來た大阪から、知らぬ他國の東京で苦勞しつゝある時、いつも地金をむき出して失敗ばかりしてゐる。彼は天真爛漫だとお世辭にも買つて呉れる篤志家もなければ、可愛想だと同情してくれる慈善家も無い。却つて思はぬ人から敵視されて、其理由を發見し得ないので後悔することが多い餘り賢明なやり方ではない。一口に言へばオツチヨコチヨイの亞流を出ぬので、只、いつも、あらゆる物事を善意に解釋して樂天的に暮してゐるから、健康も頗る達者で、二十臺には、生命保険に割増がつくといふのを理由で保険を斷り得た位の蒲柳質であつたにも拘らず、老境に進むに従つて益々頑健で、従つて醫學上の智識や生理學のことなどには、天から没交渉で、心臓は左右二つあるものだらうといつて笑はれたこともあれば蛋白質が下りるとか、じん臓がわるいといふやうな病氣の意味はいまだに判らない。一寸聞くと虚言のやうであるが

その位達者であるから、我々同人が寄ると、脈膊がイカツ打つとか、朝、目を覺ますと床の中で足の親指を動かせば健康によいとか、僕はラヂオの體操を小供と一緒にやつてゐるから朝飯がウマイとか、ヤレ玄米だ、ヤレ胚芽米だといふやうな效能澤山の、但しいささか心細い話ばかり聞かされるけれど、未だ嘗て實行しやうと思つた事が無い程、無關心だ。

○

近頃は又、ゴルフをやれ、年をとると追々に腰が曲る。其弓張型豫防法にはこの位、妙案は無いと勧められるけれど、元來勝負事が嫌ひで、碁も將棋も球突も、花合せも試みると天才らしいが、少しも興味が無い。五六年前に臺灣に遊びにゆく船の中で、麻雀を二三度教はつたが、直に覺えるけれど馬鹿らしくて熱心になれない。それではデッキゴルフはどうかと誘はれて試みたけれど、どうも興味が乗らない。籐椅子に横たはつて案内記でも讀む方が柄に合ふので此性質は、回向院の相撲を未だ一度も見ることが無いのと、一致するかも知れない。角力といふものは強い方が勝つのだらう。それが何が面白いと言ふ程野暮では無い積りであるが、兎に角勝負事には氣がすまない。

阪急電鐵の沿道に、競馬會社を作つてお客引をやらうといふ相談は恐らく何十回持ちかけられたであらう。我阪急沿線の住宅地は高尚に發達せしめ度い、各種の學校を澤山に點在せしめ度いといふ方針があるから、否決した其理由は公明正大であるけれども、私個人としては見た事もない競馬に興味を持たないのも、取合はぬ原因であるかも知れない。

勝負事が嫌で、身體が健康で、そこで女は？ と來る。品行方正であつたならば滿點であるが、そうは問屋が卸さないだらう。若い時は驚啼かせた事もあるが……と、既に過去を語るやうになつては人間も駄目だ。お嫁に行つた長女に生れた二人の孫が可愛くて、目の中に這入つてもかまはない程嬉しいもので、お菓子やおもちやの賄賂を提供しなければ近づかないのを無理矢理に引寄せて、脊中に乗せて、四つ這ひになつて、馬にもなり兼ねない自分の態度を考へると、「賣り家と唐様で書く三代目」はうまい事を言つたものだと感心する。こんなに可愛がられて育つた小供がエラクなる理屈はない。孫としての人間に對する老人の責任は重大である。餘程冷靜に、愛に溺れず嚴重に育てなくてはイケない。可愛がりすぎてはイケない。と理屈は百も承知して居るけれど、孫の可愛

さは、老ひ行く人々に運命づけられた天の配劑で、鬼の眼にも涙があると同一であるかもしれない。

○

私の一番嫌ひなものは偽善家だ。私はどういふ譯かこの偽善家に非常な反感を持つてゐる。人一倍憎くらしく思ふ。それには一つの理由がある。私の親友で秀才で現に立派に成功してゐる老紳士が——これは其青春の時代の話であつた。學校を出てから、新派劇の筋書に能くある通り、世話になつて居た家の娘と昵懇になる。娘の親も晴れて夫婦とするのを楽しみに、足らぬ勝の世帯から此男の爲めには最善の犠牲を拂つて居たのである。餘り大柄では無かつたが、可愛らしい娘であつた。まだ肩上げのある、其頃流行つた綿大島の大柄の平素着に、唐チリ緬の友禪の帯をお太鼓にしめて、能く二階に來て我々にかかはられたものだ。彼是二年も同棲したと記憶する。それが圖らずも、某實業家の金持から懇望されて其令嬢を嫁に貰ふといふ話が持上つた時、二ケ年も馴染んで居た小娘を、お金本位に、簡単に片付けて、權門に走つた花婿の鮮かな、冷酷な、人情味の無い仕草に對して癪に障つて居たのであるが、それから渠が溫厚なる人格者として、才

人として世間から崇拜されつゝ、榮達して居るのを見るにつけて、何にもそれ程、根に持つて彼是言ふには及ばぬ、世間有り勝ちの一小鎖談に過ぎない事實譚であるが、其當時小娘の不幸に同情して居つた私は、こういふ型の紳士が、ウヨウヨしてゐる社會相對して、お可笑しい程反感を持つてゐる自分の性格が、自然に、交友の間に、好嫌が餘りに露骨になつて、お世辭やお愛嬌で當座を胡魔化することが出來ず、其結果は、敵か味方かと簡單明瞭に區別して、廣い世の中を自から好んで狭く暮らして來た損な性分であることを、充分に意識しながら別段に後悔した事もない。それで通し得た自分の幸福を感謝しつゝあるので――、誰れに感謝するのか、天か、地か、神か、佛か、それは全體、私は今誰れに感謝するのであるか、と、考える時、これが所謂、俗に齡のせいと言ふのであらう。餘りに幸運な私すら、苦しい時の神頼みと同じ意味に於てほんとに有難いお天とう様だと感謝してゐる。若し、露骨に言ふならば、此感謝の念が、不圖した瞑想の瞬間に於て先づ第一に、我が老妻に感謝せなければならぬと、口には言はねど堅く信じてゐる。私にはそこに一つの迷信があるからである。

○

五人の小供がいづれも親孝行で立派に成人し得た誇りは勿論老妻内助の賜であるが、此夫婦の中に、私のやうな理性生一本で、いつも屁理屈で頭から女房をへこまして居るにも拘らず、ある迷信に安堵してゐる點があるから可笑しい。それは、女房が私のお嫁さんになつた時、一つの堅い／＼信念を以て、神様の宣託のやうに、おごそかに下し玉はつた豫言者の陸言であつたからである。「わたしを妻にした旦那様は、わたしが生きてゐる間は必ず出世して、エラクなる。それは六つの時に私に神様からおつげがあつた」と言ふのである。私はさういふ馬鹿らしい話を長い間忘れてゐて少しも、眞面目に心に留めなかつた。然し、餘りに幸運な私は、徹頭徹尾、嚴肅其物のやうな妻君に對して三十年來何だか物足らぬ、やさし味に乏しい。一寸一例を挙げると、「オイどうだい」と言葉かけると「なアに？」とニコツと微笑を、それがたとへ總入齒でもよろしい。白い齒でも見せて呉れるならば、そこに一種の温か味が湧出するのであるが、我が妻君は、斯る場合にも「何んで御座いますか」と四角な切口上でなければ納まらない。餘程碎けた時でも「何んですか」と笑つては損だといふ風に眞面目だ。私が造作を崩して初孫を抱き上げる時でも、端座之を久ふして我が孫を迎へるといふ儒教流の頑固さを持つてゐ

るから、此點に於て我妻君は到底私の敵でない。私はどちらかと言へば、不良老人のグループに何時でも飛込む資格があるので五人の小供の親としては、妻君の全責任を謳歌してゐる。其嚴肅な賢夫人としての妻君に一つの矛盾がある。其矛盾に私が引づられてゐるから家庭圓滿にして而して天下泰平である。

それは妻君が六つの時に豫言者から授けられた御神託である。妻君はいまだにそれを信じてゐる。あせゆくうば櫻の春の名残をしのぶ、古き昔を追憶してか、彼女は六つの時のありし面影にあこがれて、夢のやうに憎乎として冥想するのである。

赤星家の大賣立に數百萬圓の茶器があつた。其名品の舊藏家は大阪の長者番附に歌はた「炭彦」の一番番頭として若死をした某が彼女の父親である。天満のとある屋敷の前に、いたいな幼き彼女の手まり歌に戯るゝを見た異様の豫言者は、恐らく虚無僧か或は、ゑんの行者のやうな男であつたらう。彼女を伴つて彼女の母親の前に「此幼児には後光がさしてゐる。此兒を妻にした男は一生安樂に、必ず出世するから大切に育てなさい」と言つて悠々と引つた黄昏時の此エピソードが、幼心の彼女に或る一種の信念を與へたと見へて「私の活きてゐる間はあなたの幸運は続きます」と威壓的に、おこ

そかにのたまふ我が妻君に此性格の矛盾があるから面白い。此種の滑稽味が如何なる場合にも露出するならば、私は尙一層幸福であるかもしれない。然るに、彼女は餘りに眞面目であるが爲めに私が脚本や小説を書くといふことすら、昔風に、戯作者氣質の、卑しき道樂と迄は蔑視しないとしても、堂々たる實業家として三文文士の亞流を學ぶのは下劣である。況んや輕少の原稿料を得て喜ぶ私の得意顔を冷眼視する態度を見る時、私は何時も考えさせられるのである。女として賢夫人に生るゝ人は不幸である。女子の無上の幸福は恐れられるにあらず可愛がらるゝに在りと、然し、可愛がらるゝといふやうな其意義すらも、彼女は第二義に軽く見てゐる。五人の小供に甘すぎる私は「あなたは全體小供に甘すぎるから困る」と文句を言はれつゝ、小供の爲めの親としては、我が妻君が生殘る上は私はいつ死んでも心残りが無い點に於ても、私は實に幸運である。況や彼女が所謂御神託によつて、どうしても私は女房より先に死なねばならぬと祈つてゐるそして私位幸運な男は少ないだらうと自覺する時、いつでも此御神託を想ひ浮べて迷信の快感をむさぼるのである。

廿三日の夜は大阪俱樂部同人の宴會で、席上一友人から眞面目に忠告された。「恐らく君位幸福な男は少なからう。有ゆる趣味性に富んで、書畫骨董茶の湯にお茶屋遊び硬軟使ひ別けが出来て、借金は多い様だが財産も餘るだらう。會社の事業は思ふ存分に誰れに遠慮なく獨裁専制でやつてゐる。少女歌劇など若い女の子を引廻はして藝術の畑まで荒らして言ひ度い三味に暮らせるから羨ましい。時々罪亡ぼしに奢らないと冥加が盡きるよ」と批評される迄もなく、正に其通りだと信じてゐる。試に、私が日記を、書くものとせば、此二三日の行動は幸福の連鎖劇である。私は廿二日の朝、大阪へ歸ると、山積せる會社の事務を片付けて、「サンデー毎日」の「私から見た私」を書いて、それから寶塚に音楽歌劇學校の學藝會にゆく。此夜は寶塚年中行事の催しもので四千人の大劇場には廊下から花道際まで五千人餘りも立錐の地なく混み合つてゐる群衆の景園氣に浸つて、花柳の粉脂なしに、紅紫爛熳此の如き花のやうな世界が日本のどこにあるだらうか。正に天下の奇觀である。我がパラダイスに於ける春宵の一會は、玲瓏たるオーケストラに開いて、新興藝術の勝どきを揚げてゐる。私は、斯る善男善女のファンに親んで、江戸三界の俗塵を洗ひ得るのである。私は大劇場の二階の側面に於ける、私の椅子にもた

れてウツラ／＼と華胥の國に遊ぶ時、靜かになでる音楽のメロデイの中に陶醉して憂鬱も煩悶も、そこに汚らしい慾念の俗情から離れて、いろ／＼に考えさせられる。寶塚一黨の行く道に就て、私の理想である大劇場と國民劇の創設等、全然別箇の世界に遊ぶことが出来る。私は幸福だ。東京電燈會社のやうな本筋でない會社を更正する私の責任から随分イヤな事ばかりが多いのでウンザリする。二三日大阪へ歸つて靜養しやうか、といふ風に考えてこゝへ歸ると、私の頭腦はイキイキとして何等靜養の必要を感じない程、局面開展の功能がある。お醫者さんよりも、草津の湯よりも私には、こゝに寶塚の新溫泉がある。雪月花三組の混成出演は、今宵の亂舞であり、チャズである。血の燃ゆる若者の群れに交りて、香り高き珈琲に語り得ることの楽しさよ。私は終演の最後迄彼女達を目送して池田に歸つたのである。

○

池田は皐月山の麓の果樹園の中に在る。何ぞ我家の安泰なるや、私は甲斐の山峽に生れて、釜無川と鹽川の合流點に育ち、秋毎に洪水の坭に見舞はれて、戦々兢兢々として平靜の夢を破られて來たので、此山腹の高見から、遠い尼ヶ崎方面の海原の光りを、夕陽

と共に、遙かに眺め下す春暖夏涼朝な夕な田園的生活に遊んで、何不足なく好々爺として暮らしてゐることはこれ又無上の幸福だと信じてゐる。私はスチームの暖き洋室に一夜を明かした。廿三日は半成の百貨店に暮らして、阪急食堂でいつもの通り晝飯をとる。民衆食堂として現に毎日一万人以上のサービスをなしつゝある此食堂は、やがて全部竣成の上は毎日平均三万人のサービスを成し得る計畫である。壹萬五千圓の賣上として一ヶ月四十五萬圓、一ヶ年五百四十萬圓、一日二千圓の純益として毎月六萬圓一ヶ年七十萬圓を計上しやうといふのである。此種の空想を抱きながら、數千人の雜然たるお客様の移動を眺めつゝ、トーストパンを試みる私は何といふ幸福な男であらう。全體私は客商賣が好だと思えて、百貨店だとか、食堂だとか、劇場だとか、或は電鐵事業だとか、世人の多くは、五月蠅くて面倒臭いこつゝいふ仕事は馬鹿らしいと思ふのみならず卑下すべき下等の職業のやうに蔑視するにも拘らず、私には非常に興味のある。授けられた天職と解釋して、得意になつて働けるから面白い。私はかくして一日を楽しく働いて其夕方から大阪俱樂部同人の、所謂不良老人組と目されてゐる連中の宴會に賑かな脱線振を見て、夜行特急の寢臺車に乗るべく梅田停車場に着くと、私のあとを大朝の記者

が追駆けて來た。圖らずも同車すべき下村博士の紹介によつて此青年記者は單刀直入に私に質問した。

「あなたは阪急の社長をやめて、東電を専門にやるので、いよく東京へお引越になるそうですね。事實ですか」傍の一人は曰く、「阪急の社長にはもとの兵庫縣知事の長さんがなるといふ噂ですが……」と何といふなさない質問であらう。私の會社は、知事の古手などをかへぎ込むほど亂暴な會社と目されてゐるのだらうか。我阪急の社員諸君に對しては甚だしき侮辱である。私の後繼者は寧ろ人才超過である。何を苦しんで官吏の古手を雇ふべき。又何を苦しんで阪急を捨て、東電に走るべき。東電は日本一の大會社であるからと言つて、小なり共日本一の模範的電鐵たる阪急のプライドに比較すれば雲泥の差である。私は何にも武藤さんの慰勞金三百萬圓を羨望し、之を空想しやうとするのでは無いけれど、創立時代から今日迄に育て上げ、尙ほこれを大成すべき計畫を遂行しなければならぬ責任の地位を捨て、東京に移るべき理由は毛頭無いのである。「馬鹿氣たことを言ひ玉ふな、阪急は遠からず大成せしむることが出来るのだから、武藤さん程は貰えなく共、大きに有難いと喜ばれてお金を貰つて隠退するのが上策で安全だとい

ふ事を心得えて居るから、此寶の山を見捨て、知らぬ他國で苦勞する程馬鹿ではないよ。沈んや社長の地位を知事の古手に變るに於ておや。眼先の見えぬ質問をするものではないよ」と傍若無人に罵倒するのが私の悪いくせで、この悪い癖を二十年來發揮し通し得た私は何といふ幸福な男であらう。其代り此青年記者の爲めに、此話は大阪朝日の經濟面に「蛙の面」と題されて絶対に好意を持たない半欄の記事となつて現はれてゐる。けれど、大阪朝日に悪く言はるゝことは既に、免疫性であつて、今更何とも思はない。大朝との喧嘩なら何時でも買つてやる度胸文は持合せてゐるから、別段にうらめしいとも思はない。——なぞと平氣で書ける丈俯仰天地に愧ぢない私自身は何といふ幸福な男であらう。

私は、今、偶然に此の二日間の日記を軽く試み得る其片鱗に於てすら、私の幸運を象徴し得たと信ずると同時に、「何んだそんなことを、お前は幸福と心得てゐるのか、其志や小也。あはれむべき哉」と冷笑する人のあることも知つてゐる。私には大きな野心は毛頭ないのである。其時の境遇に處して、身分相應に自分の考えが實現され得れば、私は満足する。其満足することが私の幸福であると信じてゐる。そして、一日も早く事業界

から去つて其老來の朝夕を劇界に送り度いものと祈つてゐる。「私から見た私」は恐らく私より外に知る人はあるまい。それ丈手前味噌であることは勿論である。

(昭和五年一月廿八日)

奈良のはたごや

糸内未

定價金壹圓

昭和拾年拾月拾五日印刷
昭和拾年拾月拾貳日發行
普及版

著者

小林 一三

發行者

岡村 祐之

印刷者

瀧澤 松平

印刷所

瀧澤 松榮堂

發行所

岡倉 書房

東京市神田區淡路町貳ノ七
電話神田貳〇壹〇—壹
振替東京貳五九參五番

平山蘆江先生著作目錄 同倉書局

花柳隨筆集 左 續·左 棲人情 定價貳圓五拾錢 送料拾錢

藝者繁昌記 定價貳圓五拾錢 送料拾錢

藝者花曆 定價貳圓 送料拾錢

花柳行狀記 定價貳圓 送料拾錢

隨筆集人間道場 定價貳圓 送料拾錢

怪談集蘆江怪談集 定價壹圓貳拾錢 送料拾錢

都々逸集蘆江歌集 定價壹圓五拾錢 送料拾錢

花柳小說東京四季 定價貳圓貳拾錢 送料拾四錢

同倉書局
發行所
東京市
丸の内區
丸の内
三丁目
一丁目
同倉書局

小林一三隨筆集奈良のはたふや定價壹圓

岡倉書房版

終